

令和7年度 学校だより



りんごの里から 3月号

青森県立弘前第一養護学校 令和8年3月25日発行 校長 石戸谷 恒鋭

啐啄同時（そったくどうじ）

今年の冬も豪雪に見舞われ、スクールバス運行をはじめ、通学に際して大変ご苦労されたことと拝察いたします。保護者の皆様の温かいご理解とご協力に、深く感謝申し上げます。

この頃の暖かさに誘われ、晴れ渡った空には、北帰行する白鳥の群れを目にすることが多くなりました。空に響き渡る力強い鳴き声に、確かな春の足音を感じる頃となりました。

これから白鳥たちの多くは、シベリアやオホーツク海沿岸へ戻り、繁殖活動に入るそうです。白鳥に限らず、北へ渡った鳥たちの多くは、そこで卵をあたため、雛がかえる時期を待ちます。

親鳥が卵をあたため、いよいよ孵化（ふか）の時期になると、卵の中の雛鳥は内側から殻をコツコツとつつきはじめます。すると、それに応じるように、親鳥も外側から殻をつつきます。雛鳥が内側からつつくことを「啐（そつ）」、親鳥が外側からつつくことを「啄（たく）」というそうです。

この内からの「啐」と外からの「啄」がピタリと合うことで、初めて殻が破れ、雛鳥が生まれてきます。雛鳥が無事に誕生するためには、このタイミングが何よりも重要であり、雛が内側からつついているのに親鳥からの手助けがなければ、雛鳥は命を落としてしまうこともあるそうです。内側からの「啐」と、外側からの「啄」が、同時・同処であることが大切なのだそうです。

実際に動物園でフラミンゴの孵化を観察された方の記録によると、雛がかえるまでには二時間半もの時間を要したそうです。その間、親鳥は一方向的に殻をつついて割ってしまうのではなく、雛の様子を見ながら、お互いに殻を破り生まれてくるのを待つのだそうです。

こうした様子は、禅宗（曹洞宗、臨済宗、黄檗宗など）において「啐啄同時（そったくどうじ）」という言葉で表現されます。禅の世界では「雛と親鳥」の関係を「弟子（修行僧）と師匠」に置き換え、両者の息が合うことで初めて成長につながるという教えとして用いられます。弟子の成長を感じ取り、師匠が導きの機会を設ける。たとえ師匠が励まして、弟子にそれに応じるだけの力が育っていなければ、修行は進まないとも言えるそうです。

私たち大人と子どもとの係わり方も、まさにこれと同じではないでしょうか。

「将来、子どもたちが自分の力で歩いていけるようにすること」。それが、子どもに係わる私たち大人の役割なのだと思います。

そのために、毎日の子どもたちの姿に合わせて、うまくできている時には「そうそう、その調子」と温かく見守り、うまくできない時には「できるまでじっくり待つ」「優しく導いてあげる」。そのような絶妙なタイミングでの係わりが大切なのではないのでしょうか。

今年度も、日々の授業や校長室へやってくる子どもたちの様子から、その確かな成長に触れることができ、大変うれしく感じる毎日でした。本校を支えてくださった皆様にご心より感謝申し上げますとともに、次年度も引き続き温かいご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。